

春の野やあの圖わすれな牛の形

世のしつか牛になそらへくれの年

牛の啼道一筋かおほる月

牛の子の鼻あて、見る胡瓜哉

牛肥て家土産買ぬしくれ哉

虫籠をさけて戻るや牛の角

牛の子に荷のつけ初や春の草

ゆるされて花野へ行か牛の聲

小松原いくち紅苜女牛

牛の屁や聞んこするか呼子鳥

淀鳥羽も見えたり牛に稻の花

いつかたの花智殿そ牛に樽

同 芳 則

大 阪 李 投

周 防 鴈 川

播 州 固 頑

江 戸 林 瓜

イ セ 里 白

同 乙 由

石 蓮 寺 樂 風

大 阪 鷺 岸

京 蚊 力

イ セ 水 甫

京 方 堂

百合もゆり寝たりや牛の氣のゆふさ

牛に乗て後の笠や花すゝき

冬枯に若草まつや牛の聲

その牛の涎や秋の哀さを

七夕や寝て居る牛の心なき

明くれや牛を引出すほこゝきす

瀧つほに牛をあらへは猶涼し

妻乞か乗れなからに牛の啼

牛飼や麥の黒穂の作り鬚

牛の子の目もこねふたし女郎花

若草をふとんに牛の晝寝哉

牛も牛車いひきを晝寝哉

同 高 山

イ セ 反 朱

大 阪 紫 英

京 順 風

同 和 草

京 秀 石

イ セ 蘭 少

播 州 求 己

同 溪 士

イ セ 汀 芦

同 莊 草

和 州 利 方

岡の部の躑躅や牛の袋角

牛なから一つかみ持相撲花

牛の子やくゝりかねたる梅の垣

秋風につれてさひしや牛の聲

草花の聲に匂はん野邊の牛

ふる程をうかめて牛の時雨哉

夕立や跡はれて行牛の聲

牛の子や歎冬かつく川むかひ

夕くれや燕のやこりし牛の角

蠶馬にはちかれて鳴小牛哉

もうくゝ霞に吠る小牛かな

五月雨や牛の頬うつ虹の跡

イセ季覽

和州柳川

新稻柳谷

大阪盃弓

丹州福知文花軒

京岷江

守部邑齋

トクラ柏溪

富田桃溪

同閑三

アノウ雪溪

法界寺蘭溪

さみたれや牛に乗たる從弟相

牛冷す間も水なふる童かな

さそ牛にかみさゝせけん女郎花

けなりさは牛のあゆみや大晦日

夏野かな牛につけ行夢いくつ

若草におやにつれそふ小牛かな

いく度も花につなかん牛の綱

早乙女や牛かはなれて腰をのす

起かへる牛の陰より荊の花

風そよく牛の腹より雲雀かな

こりへいて牛の背に見る花野哉

牛寒く井筒の君を見たりけり

今在家旭芳

播州里水

同丸蝶

京久之

同二ト

加古川友松

播州亂雅

新稻一慶

江戸百里

同尺草

池田朝道

江戸東潮

春の暮いよく牛に乗る身哉
 牛の背に尻をかけはや草の花
 牛引て山路の伊達やなけ頭巾
 牛の上にゆらるゝ笠や雪の花
 野も枯てかゝれさてしも牛の尻
 ゆく牛の心物なし秋の暮
 木からしにこほれて牛の晝の聲

兼牛牡丹二題

長閑さや牛のこうさも足疾鬼
 連牛の日比はにくき花野哉

池田藤貫
 伊丹鷺助
 大阪柳波
 イセ團友
 江戸山夕
 同艶士
 大阪その女
 京團水
 同如泉

露けしや牛にもたるゝ薄の穂

海 棠

ゆたりくゝ柿突の杵

伴 自

秋の月茶臺の穴へ手を入れて

同

これはふるいと咄やめさす

棠

かいさまに浴衣引はる旅衣

同

池にうきくゝ荷の葉の錢

自

紙燭にてたんすの先の物を取

同

顔の黒さを髪へやりたい

棠

うき戀を貧乏樽にかたり寄

自

ふらぬ曇りの冬はこすこい

棠

たゝたのめ背にすゆるさしもくさ

自

玉のありかをさかす濱焼

棠

かねを借る句面はかりに二百石

坊シのたよりに染物をやる

水壺に大きな枝の花さかり

温泉をふれ廻る臘夜の月

春を経し崑山集の連衆にて

ひかぬ琴ならひらに二階へ

指先でぬける談合のかためする

お近付にこ女房よひ出す

なんこやら眠たい空にほこきす

雨守口に佐太の天神

鎧着る日用にほつこ草臥て

薬罐て茹て蛸を引ぬく

自 棠 自 棠 自 同 棠 自 棠 自 棠 自

あれがかこ云る、物か色ふかひ

はやきぬくゝに懐のあく

けしからぬ芳野はつ瀬の山嵐

掃ゆかめたる箒なをする

瓢箪で芋もる様に世を過て

夜ふりに出る鱈の宵闇

人事に口のすふなる秋の風

袋の中の高館に寄る

つねの木もけしき立たる花の空

いけぬ顔して薺喰る、

十哲も孔子の餘座にかゝられし

日々にゆたかに日々にあたゝか

棠 自 棠 自 棠 自 同 棠 自 棠 自 棠 自

夢名殘俳諧集卷六

夢菴句

寄夢菴懷舊

夢ごしれ月雪花の庵の跡

みこり萌そふ草の石竈

小盃巴の字の水に待こりて

横日の顔に扇あてかふ

のせる事よう覺へたる駕籠の者

海棠

鷺水

同

棠

同

むすこ持しを自慢さう也

京の餅何ご奇麗にや御さらぬか

文はよめねご一步一切レ

うき泪おもひ出しては又こほし

謠のつれのあれも俊寛

闇ごりにまけて芝居の留主をする

寝巻から先袖つめて見ん

十露盤に浮世の工夫はちき出し

今年は慥名月の蝕

盆過はごふやら急に淋しうて

升こり習ふ藏付のまへ

そゝくさか親父にいきのうつし也

水

棠

水

棠

水

棠

水

棠

水

棠

水

棠

例の烏帽子に例の装束

尾髪迄駒もあふひにかさられて

水と箒に砂かしたつまる

國の地理尺の屏風に筆を嚙

つゝんであるか御亭主の箸

さまくゝと嫁の利發をためす也

こかく惑所は留てやこまらぬ

荒こもに化名を隠す首縊

時雨しらけに明はつる雲

霜月の下の弦月影も見す

いつれこも實不落居な醉

上善の奉加は人にかつかせて

水 棠 同 水 棠 水 棠 水 棠 水 棠 水 棠 同 水

寄ていなふか祇蘭清水

御屋敷の料理に明日も明後日も

墨打せよと木綿抛やる

峯の花くみさる足の湯に落て

相手ほしけに獨活にぶきつく

ひと連も餘程の物が歸る鴈

箴はつれて紙鳶に揚弓

水 棠 棠 同 水 同 棠

ぬる蝶の夢想やひらく花の下

休圃

牡丹花の庵に巣つくれ呼子鳥

鴨立庵 三千風

松風の残るやふるき庭の霜

大阪 諷竹

はしめて海棠の草庵をたつねて

擦子にて百舌鳥の草莖草の庵

同 東行

身の花や夢に踏たる金の屎

京白梅園 鷺水

木に川に實さは涼し喩如火宅

江戸 艶士

おもふこし事かたのみか

遙なる行末迄のね覺せし哉

襟巻もつめたくなりぬ冬もはや

大阪 文十

生涯を胡蝶の夢の中ささくられけん

夢の庵の夢は人口に残るのみ

いまはまた畑のぬしが飛胡蝶

同 舍羅

手を打て難波の春は庵より

伊丹 人角

時折は鹿も来て鳴け庵の秋

池田 里諷

こゝらかさ月にむかふや庵の秋

同 藤貫

萬事みな夢の庵や花の跡

イセ 團友

飛鳴して窓に過れり顔の蠅

江戸 山夕

夢にすむ庵やさはん閑呼子

伊丹 鷺夕

懷古人之語

月や夢の覺ても木の間くかな

同座 神

かうろぎの聲や連歌の反古ばり

江戸 專 吟

夕くれや越瓜ひこつ夢の庵

山田 吟 鶯

雪の夜は狐の寢言靜なり

大阪 東 里

花のすさうら壁つくる庵かな

三宅 吟 東

木からしに升から出たる鼠かな

大阪 海 音

京薄八分字の額か落かゝる

カヤノ 蘭 風

出て見よ夢ならわれをほこゝきす

池田 邑 水

霜かれのすゝのかりいほ春雨のこ此花人のよまれし

も今さらに思ひ出られて

柱から脂も出つゝ春の雨

大阪 潮 白

花の夢いてその時の庵の跡

同 三 惟

たんほゝの花や庵の前うしろ

同 幸 方

夏の夜のあつい茶漬に豆腐なし

江戸 琴 風

秋の夜はたゝ茫然と瓦焼かな

大阪 我 亮

檜の葉や落て何ともなき垣根

嶋 生 水

抱籠は物申さぬをこりえ哉

大阪 榛 國

枯菊の芽いつれ庵の生□

クマノタ 龍 軒

ひこしほの秋や月こる庵の壁

池田 玉 水

釣鐘や夢の消ゆく雪の庵

クマノタ 吟 劔

畑うたぬけしきや庵の跡の草

池田 寸 道

寝て覺て夜寒の伽に疣湯哉

伊丹邊 成 松子

おもへその若衆の紙衣しやつきりこ

大阪 谷 江

つれくゝや夢庵の奥のかんこ鳥

鴻池 百 三

冬の野や吹ちるやうな庵ひこつ

池田汲外

いちくゝと夢ちゝまりぬ雪の庵

櫻塚柳郭

春をまつ人もこかしや夢の庵

今在家旭芳

草さひて野分吹越す草の庵

トクラ柏溪

萩の露井戸に時うつ夢の庵

トンタ桃溪

夢覺て寢よとすれやはやきやらくし

池田百千

みちか夜の夢にちつくり庵かな

大阪大鷗

夢覺て腰窓白し蕎麥の花

池田可棟

雪の夜や間鍋提て夢の庵

大阪鷺岸

扱も夢庵に枯野に萩の柴

同紫英

夢の世と落つけかたし庵の花

播州求己

落葉してまた寢に戻ら庵かな

法界寺蘭溪

馬持の隣よ秋の夢の庵

守部邑齋

庵の戸やあるしは瘦て初しくれ

イセ反朱

僅に起てまた寝る庵かな

同里白

わか夢を人にしられし夜寒哉

京和草

夢の夢さむればもこの時雨哉

同應水

もしれんと夢の庵やほととぎす

イセ水甫

夢庵へも覗け吳服の初燕

石蓮寺之風

落葉する音よ夢庵の後谷

同遠風

虫聞に立寄もあり庵の跡

イセ莊草

庵しめて何と後世をねむの花

同季覽

月薄し座禪の窓の蔦かつら

池田共丸

秋の夜や起てもひこり夢の庵

播州棟風

影照よ今も夢庵の秋の月
 葛の葉の雫も夢の庵かな
 鍋ひこつ茄子もひこつ庵かな
 這入蚊に夢むつかしき菴かな
 咲花の爰にかへつて夢庵哉
 晝顔よ夢の盛の菴の庭
 夏の夜の夢の一字かその菴
 秋霜に染るや菴の草茂み
 何心なきも夢菴の秋の音
 白粥の炭のたらすや鹿の聲
 踏てある跡したふてや菴の雪
 今もその折はしくれてむかし哉

同 亂 雅
 イセ 汀 芦
 同 乙 由
 大 阪 風 麻 呂
 同 保 直
 播 州 溪 士
 下 備 井 前 盤 孤
 大 阪 李 投
 播 州 里 水
 江 戸 渭 北
 新 稻 一 慶
 大 阪 芙 雀

月影にゆかしや庵の反古張
 若竹や次第にふかき庵の跡
 其庵の秋もゆかしや藪の奥
 心して落栗落よ庵の屋ね
 をもしろい夢や見るこて花見酒
 夕貞や頭をこする上蔀
 最そつこてこゝかぬ夢や夏の月
 その跡に朝貞植よ夢の庵
 物見るにまたない友や窓の月
 蝶飛や夢の庵の麥ふくろ
 なかの夜を無事なそなたか軒かき
 みしか夜をなかいは夢のおもひ哉

同 扇 芳
 池 田 久 保
 新 稻 柳 谷
 大 阪 盃 弓
 京 重 晴
 周 防 鴈 川
 紀 濫 吹
 大 阪 春 水
 池 田 一 葉
 イセ 柴 友
 ヒロシマ 井 水
 京 万 里

煉箸に物の闇を蟬のこゑ
 至尊の夢を出るや雪の庵
 雨寒し佛のけたる釜のうへ
 月やむかし庵主の夢を掘てきた
 よい夢をさまされにけり紙子夜着
 夢を断ッ砧の利劔すき又なし
 月雪のあけておかしや宵の夢
 明行や夢もしらく雉の聲
 猶ゆかし庵訪ゆけは鹿の跡
 曉や夢の庵の紙衣夜着
 人見んさ爪に眉かく端居哉
 その時の石も残りて真葛まづ這

江戸蘭水
 同止水
 大坂八虹
 伊丹春堂
 大坂矩久
 伊丹濁水
 池田朝道
 大坂柳波
 同沖風
 同岸紫
 同園女
 同一禮

中くゝに粟のおもたき庵かな
 床縁は枕にひくしほこゝきす
 いくはくか人の夢くふほこゝきす

櫻塚西吟
 大坂來山
 長頭丸

寄 夢 菴 懷 舊

星霜に名を枯のこる草の庵

掃な玉しく山茶花の莖

鞠遊ひ地下の男はひれもなし

ほたるの見へぬ内は日のうち

はいて行月に此雲あの雲も

箕よりたはこの舞葉こほるゝ

櫛の齒にはしる鮭荷を馬に居て

海 棠

言 水

我 黒

好 春

方 山

鞭 石

和 海

川原烏よ橋に石うつ

若衆をかはゆ過ての異見也

拂ふて笑ふ方丈の文

踏ならず音をいかれる風呂の板

冬に味のる鴨や大根

唐物をなくさみ草の中間賣

さしもの醫者か戀の荷擔人

むかふたる公事にかみや片思ひ

帯のふそいに腹ちからあり

灌佛や鬼もなみたを洒らん

日和こしれて月も紅

長袖の禁野の鶉狩しまひ

郁 翁

晚 山

執 筆

言 水

海 棠

好 春

我 黒

鞭 石

方 山

郁 翁

和 海

晚 山

霧まかきして水の碓

人の子の年はへ云は、花の晝

七ツの面ンを神へうらゝか

やすらかに馬舞おさめ弓はしめ

口にひたして名香の嗅

にしみ出す曇に山ははや白き

嫁か達者を見ずる麻苧

折れた柄をひろふてそ猶ますかゝみ

歌占舞は足の流るゝ

世中を尾張にせかれ加賀に居て

すそへあまるか二尺三寸

宵闇に菊かうなつく南風

言 水

我 黒

好 春

方 山

郁 翁

海 棠

鞭 石

和 海

我 黒

言 水

方 山

郁 翁

やさし禿の月に願立

いつ出来て来るそ踊の伊達ゆかた

すめは都へ手のこゝく嵯峨

あけたてに猿戸なつめのくはい也

素人針を所望めいわく

浮草のうへ吹流す涼ふね

刺れと黒きをいみて茶衣

武士の矢たけ心て片香車

筑波を廣に膳もつて出る

胸高になりて乳首の耻しく

疊のすれにはけし爪紅

おそろくか内侍の鈴に花の鳥

晚 山

素 流

海 棠

好 春

和 海

海 棠

好 春

我 黒

鞭 石

方 山

郁 翁

言 水

春の物こて裏白の巻

晩山

夢下五六

夢遊居

肖柏花老の清隱風流草山上人の傳に記し殘
されしを見るにも後は池田の幽栖に住るこ
そ名のみ草庵にのこりてなつかしそれをし
たふものは誰そや今の海棠の俳士也世く
につゝきて此家にとゝまるをなかんつく祖
父夢遊居士たのしみさせられしより風月に
吟弄し農商を事こせずしかも家富りその富

るに乗せずして生涯無妻無子を悦ひ烏髮剃
髭の物に似てむつかしこて中鬢にして常の
ましけりをこのむは是そ市中の隱士ともい
ふへしや偶京師にあそふ時も東山や北谷の
花紅葉に心をそめかえ淀舟の楫枕には遠く
も宗鑑か跡を眺り梅の翁の難波津はすむ所
より程ちかければよりく會合してよしあ
しのふしもいひなくさむよりむかし今の一
集を思ひよりぬこや先祖の志を崩さす其道
を尊するは孝なるや棠子一句をつくりても
つて家の久しきを祝す

玉椿柱も石になりかゝり

來山

夢下五七

柄に紙まいて草の苗鋤

海 棠

舟いなせや河原おもても春の日に

同

人の口こてあれを弦月（カミヅキ）

山

しら露のおきこむなかる引起す

同

茸喰ふなら生やけなやつ

筆

隠士海棠の祖父夢遊先生と聞へしは風雅に

名高くあそひ佛の道うこからねは惠林も

常に扉をたゝきて夢遊居の三字を額にのこ

せる茅屋ありものすきくこからす夏をむね

こして涼し花の時ゆかしく月のために軒を

あられ雪のあしたの野は目前にひろし海す

こしへたてゝ遠山幽なり一重に牡丹花の夢

庵にたよりたる名にやすへて古人の心さし
其徳を隠すへきためこしてかゝる山居の安
閑をつくくくなつかしみ侍りて

久しさをおもへは涼し松の陰

諷 竹

ちらりくゝと花の浮草

海 棠

もの云ふと隣も鋤をつゝぱりて

ちつと降つても大事あるまい

立待も居まらも過て下り月

つねより食のすゝむ秋風

随分と奇麗にそたつ菊はたけ

同 棠 同 竹 同

利發にあまる祖母の潜上

もごかしき小うたに酒やしみぬらん

時く雪の落る笹の葉

寢所にくらき行燈の消次第

そちの存分云てお見やれ

ありやうはみつちやこそあれよいおここ

めんのゆるさに村も長久

茶ご月にこふても夜か晝になる

何角を止てさらは茸狩

花生におもふはづみの竹もなし

寺は彼岸の談義もつはら

鶯の鳴草臥ておしたまる

竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹

なましい柴にぬるき日當り

旅人に水のかるみをほめられて

むすこごそりの合ぬ禪門

雪ならは何ンぼよかるに風かふく

加茂もたゝすもけふはひつそり

ともかくもご社は云ね待こゝろ

文から手から分なやさしさ

惜けれこやろふ薄も鶏頭も

馳走をめされ盆の珍客

來月の今宵かやうに照かしな

瀬田へもたつた五里か七里か

あの人の云るゝ事は引て聞ケ

竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹 同 棠 同 竹

おそろく出来た汁の塩梅

鶏のはげは跡からちりをする

根つきて直る門のかたむき

おつとつて花もおもふは此一本

味に日和に續く長閑さ

竹 同 棠 同 筆

別業のひたいにのこりたればこて夢遊居を
名こそすこかや海棠のぬし此道にはけみをな
す事日出の陽氣か、やくか如ならんかした
のしいかな棠子吳服の里中にありて俳諧の

棟梁なりけらし予杖を曳てしはらく此庵に
いこふ事侍るころしも聖人に夢なしこいふ
を世話すひこへに夢なしこにはあらず朝に
思ひ夕にはかる事のよりこころをのみ見れ
はなるへしつがもなき事を夢見るは下愚か
こさきにや

さそや嘸月うの花を夢のはし

裕からはや半たちゆく

物賣の荷ひつれたる砂川に

烏はからす鷺はしらく

けふの雨かゆき所へ手のこゝく

湯婆の口ておしつけて盛

舍 羅

海 棠

同

羅

同

棠

井戸替の序に石も積直す

それ初あらしや、草にしる

琵琶の師の尻をもためす渡り鳥

丁兒の目見えすみし夕月

よりつきのよいからはやる酢醬油

眞葛か原へ二三丁ある

當る事媚過さる、沙門なり

わつかな疵で娘縁なき

寝いられぬ夜はさまくの思ひ置

丸めし物もあまりころく

苔んたり咲たり花もいそかはし

たま／＼に吹風もあたゝか

棠 同 羅 同 棠 同 羅 同 棠 同 羅 同

宇治ほこかをうけになりし春の空

轉合書も頭陀におしこむ

眼さしよしこて人を羨みて

又この宮も修理のある沙汰

涼やかに竹や櫓のひこかまへ

こなした粟を膏藥の恩

月今宵むかしうるさき馬に鞍

さうともなしに秋はさひしい

何を煮ておませこつんこ齒に合ぬ

大和てかせく弟は無事

枝／＼にふり初て置今朝の雪

きついたはここと跡で氣の付

棠 全 羅 同 棠 同 羅 同 棠 同 羅 同

嫁しかる場へ來か、つた迷惑さ

一貫の餘の錢も夢助

ほこ、きす軒のちかくに鳴ころや

やりはすれともにふい唐やう

世上みなうはつき申花さかり

うきふしもなう春のしつかさ

しら壁のかくれ家や此菊の花

いつもの通り松に有明

鯛ひくふねほい、こ呼つれて

おもしろき程風もひやく

全

羅

全

棠

全

筆

團友

海棠

全

友

戸一枚はつせは山は鼻のさき

た、情出して蕎麥の存分

假初の事にもあたまはりたかり

たま、内に寝れば晝迄

破れたもしらぬ紙衣の尻こふた

碓かりに四五升の米

花咲はこされ子達もつれまして

永うなる日こもにゆたかさ

いにし比此集を思ひ立なんなご物かたりせ

し折の三吟なり幸にこ、にしるし侍るなら

し

おくりやは金をほたんの地に敷て

菊鷹

全

棠

全

友

全

棠

全

筆

かさまの子とて盆に盃

云出して旅へ心や動くらむ

根のゆるい日の髪はむつかし

竹の葉の墨書ならふ月や雪

障子の溝か砂でざらく

登ならせんすい嶋の沖遊ひ

お腰の物のかたい誓文

明前の鶏の前後をこんこつく

栗商ひのあはれ寒しや

歌の有頓阿の状に散尾花

月の雨とて日からこんこり

股ひきて物まいる間も見つくるふ

才 磨
海 棠

夢下六八

菊 海 才 菊 海 才 菊 海 才 菊

楳の木口へにえる木のしる

ほれくこついはれあふて千代の縁

お召鹿の子に戀草をゆふ

母ひこり似合に花を慰めて

さいかしの芽は何にてもなる

大坂へ一二は落て三のこみ

椽の疊は入る時に敷

爰にまた楠多門兵衛とて

あけて零してならぬこの文

留守の灯をほそふ詠てうき涙

屋根のすくない深草の雪

老を打薬の壺にへら添て

才 海 菊 才 海 菊 才 海 菊 才 海 菊

夢下六九

草紙洗の唐綾をたつ

才

夢下七〇

下 畧

幾あかつきの松の音ふもこの莖をあらひて
風光玉案に□□道の奥義を上城に栖しめ
む事を味ふ人は誰そや當輯棟領の海棠子
先師牡丹花翁の舊地を開鑿して宮古路や吾
妻路や浪花津の風便にはしらぬひのつくし
の榮雅を斯に植て諷ふ夢庵に准て夢遊居士
云々棠子の祖者たり月雪を甚弄し一艸禪な
る事□□して又風興あり陽は井田渺々こ

して芹つみの女の童數をあらそふ一聲の山
鳥は曙雲の外解入の花皿を鬻に等し秋は標
葉や、黄みて伊駒かつらきの電をつなく雨
後の飛泉には小石流る、鏞の聲見聞風水陽
冷の五夢に戯れ一切有爲法如夢幻泡影さて
こそ夢にあそぶの朽額嗚呼よのつねなり

それこれを

下神や野を繙りて庵寒し

西 吟

夜明鳥の鳴はらす霜

海 棠

よこざるこ負れば馬も罷出て

同

夢下七一

手ン手に射場を仕舞ふ薄縁

三ヶ月の吹しはめたる纏なまの埴は

名主かまへの塀に蔦の葉

鼻たちも綿てやうして菊の禮

藍の機嫌は物にあやかる

雑魚の鹽出して置すりこ鉢

大工かはせた雪ふりの朝

御かみそりいたく迄の櫛こりて

反故の中にめうな臍の緒

去逆は不禮の多き座敷なり

薄はじつと露をわたらす

御足もいためや十方にくれの月

吟 同 棠 同 棠 吟 棠 吟 棠 吟 棠 吟 棠 吟 棠

粟てこかして齋桶の餅

かこはるゝ身はひそくゝの花紅葉

文引さいて尺八の囀

夢くらふ枕ふまへて棚な物

うつやらさるやら後はぐわさく

ふつて來ぬ其間に桑名こしてくりよ

引白藝て主のやつかい

世中よ蝸牛の木末ひまの駒

淋しい顔を壁にもたする

おくよりも暮雪の題を下されて

年にはたれもちつこあやかれや

十符の菰笹折しくかおもしろい

吟 棠 吟 棠 吟 棠 吟 棠 同 吟 棠 吟

ままだも遠かれ和歌に吹上ケ

辯口な謎かけられし袖の月

どれ七夕のたん尺を見よ

むしになるこてあたゝめてすこしやる

葩上れば微塵うきたつ

供なしか花に羽織を打かけて

蛙もほうをはつてやらるゝ

何こやら春の流れのなふりたき

牡丹の芽出し幾里の奥

棠 吟 棠 同 吟 同 棠 同 吟

海棠か祖父夢遊居の

ふるこころをおもひて

花もなし雑煮からして夢の味

風すゝし夢を養ふやこり有り

黄帝内經に陰陽偏勝の夢を評せしは身に着

ある時の談なるへし瑯邪代醉に大風塵をあ

くるこ見て覺て後風后を得て相こし給ひし

を思へば誠に韻會小補に夢は芒なりきさし

也と釋して善惡應報のきさす所を示すとも

いふへししかのみならず堯は天に攀て雲に

乗り湯は天に舌を延して大虚空を嚙り給ひ

し事留青日札に見へたり且又周禮に占夢の

言 水

方 山

品を揚しは周公旦の心なるをやそれより以下漢の文藝志に八夢あり類説に十三夢孫真人か調神論は夢見たりし時を分ちて各吉凶悔否をしめし茅亭客話には水を□□咒術をさこり論語蒙引同じく兒説唐鑑呂覽等の卷く皆夢を論するの辭義を述るの談若干也今や海棠子の祖考先人そのかみ方丈の室を築きて名付るに夢を以て其庵に冠らしめしや彼唐の是らの心にもあらざるへしされは吾朝の宗廟あまてらす御神大和姫の命にさこし給へて神風や伊勢の五十鈴に宮柱ふごしき立し上代の夢光る源氏の須磨の夢明

石の入道の須彌の夢頼朝卿の富士の夢尼將軍か買取りし夢後醍醐帝の分字の夢公朝か巫山を詠せし夢小町か夜の衣の夢亦是らにも非るへし只此室にして此號ある事所謂釋典の四夢を離れ塵俗の六淫を破し莊子が具眼鐵心の夢の覺て始て大なるを知るの夢歟

形容さめて月花いまた夢の内

京白梅園

鷺 水

目をあいて夢見し花のやこり哉

雲 靴

友くむかしを鳴や花に鳥

沖 風

遅き日の餘波や杉の一枚戸

文 十

おもふに夢は乾坤の外に逍遙するにやあらんつたへ聞く南花老人は園にたはれておの

れをわすれ盧生は一睡に五十歳をみし粟
飯の餘波を拾ふは誰ソ津の國吳服の里の産
何氏海棠丈の祖父そのひこつふたつの枕を
かさねていほりこなしあそふこいへるは寶
永二年夏の初の比にしあめれば下官もうつ
なからの筆の行衛はしらすかいやり捨給
へこそ

重雲舎

和 海

ゆめむすふいともすしや青簾

柳 波

久しさの奥も見えさる茂りかな

朝 道

此庵のおくもゆかしき水鶏哉

夢遊の夢は
花 中 の 花

ほそ櫻老を眠るやつはりに

等珉子 珉 子

故菴懷舊亦祝後主

洞笙齋

八 虹

花散てもこのこをりや棟の數

月花の種やこほれて屋根の草

三月も松こころの古跡かな

五月雨のむかしや残る谷の音

植しその心なつかし松さくら

年號もしらぬや松に虫の聲

花はむかし日にあたらしや苔の色

雨や日の底にこしへて庭清水

ふりにける木ふりやしるき蟬の聲
しくれ落葉なをくむかしかたり哉

一 愛 貞

一 葉 慶

一 扇 芳

一 灌 佛

一 可 棟

一 濫 吹

一 二 三

一 百 千

歡樂に身を抱世也月の庵

二三寢や梅も奥ある楷かゝり

涼しさに猶わけ入るや夏木立

蜻蛉に扇の虫やかつらかけ

顔せゝる蠅にここかく庵かな

木も庭も一しほ古き落葉哉

かへ歌や花の庵の朝の夢

見る程の物なつかしや雪の庭

夢菴之夢遊居士者海棠雅丈之

祖爺也所傳牡丹花老人之舊

趾而不斷挑風月燈繼花鳥嘯

因這箇之好士寄句於遊居士之

遠山

邑水

梅照

我雪

藤貫

里諷

好春

海棠

案下築反故堆也終採萃焉而

作一集也不肖亦吐滑稽一唱

呈遊居士之几右

眠花醉月 一切夢中

夢菴之主 夢遊老翁

おもかけや牡丹は蓮華今も猶

手を胸にわさこ置つゝ花の庵

日のうらゝ夢松まくら世の遁

團水

晚山

我黒

頁	行	誤	正
二〇	一	あやをれ	あやおれ
二二	三	音や萩に	音や萩に
二二	六	櫻かさして	櫻かりして
三二	八	京言水	同言水 以下七行皆京ナ同ニ改ム
四二	五	大阪虚風	同虚風
四四	九	江戸立志	同立志 次行ノ江戸モ同ニ改ム
五二	二	謙羅錦	同謙羅錦
五五	六	誰かために	誰かためて
五五	一	老の早乙女	老農早乙女
六六	五	充る	ミテト假名ヲ振ル
六六	一	渡りかね	渡リかね
七七	一	勢なの	勢ひなの
七七	七	寺町通の	寺町過の
八八	二	思ひ立ぬ	おもひ立ぬ
八八	二	〳〵〵〵へ	人〳〵〵へ
八八	四	霄閣堂	宵閣堂
八八	八	大阪季範	同季範
八八	九	鹿子ゆふ音きこゆなり	夜の雪 京素牛
八八	一〇	大阪保水	同保水
九九	一三	濁水	濁水
九九	一〇	攝鴻地	同鴻地
九九	二二	大阪	同
一〇〇	二、三、六、七、九、一一	行ノ攝ヲ同ニ改ム	攝多田

一〇	七	切る	切ル
一〇	一	寶頭廬	寶頭廬
一一	二、三、四、五	行ノ大阪ヲ同ニ改ム	同ニ改ム
一一	四	花に漿	花に漿
一一	七	瓜花	瓜花
一一	八、九	河州	同
一一	一	攝東山	同東山
一一	一	醉り	同醉り
一一	一	寒さ	同寒さ
一一	一、二、三	攝山本	同
一二	五	京	同
一二	六、九	盛り探り	同盛り探り
一二	八	和英	同和英
一二	一〇、一一	藝陽廣島	同
一二	一	蟹	同
一三	三	丁	同
一四	七	貢の	同
一五	二	しこや	同
一五	六	止丸	同
一五	一〇	櫻くむり	同
一六	七	渡り	同
一七	二	杉ヶ谷	同
一七	九	止丸	同
一八	二	たつはりと	同
一八	七	水穀に	同
一八	九	居る女	同

昭和貳年貳月拾壹日 印刷
 昭和貳年四月四日 發行

複製 不許
 春夢草

發行人 岸上善五郎
 大阪府豊能郡池田町本町千參拾八番地

印刷所兼 太陽日報社
 印刷人 代表者 原田長治
 大阪府豊能郡池田町本町千參拾七番地ノ壹

發行所 池田史談會

7-3510
2
✓

池田叢書刊行目錄

第一編	田中桐江傳	(附吉田銳雄遺稿)	既刊
第二編	雞肋集	(附荒木蘭臯遺稿)	全
第三編	山川正宣集		全
第四編	吳服奇覽	(阪上稻春丸編)	全
第五編	春夢草	(牡丹花宵柏著)	全
第六編	大東昭代詩紀	(荒木李溪編)	未刊
第七編	富永仲基遺稿		全
第八編	僧日初遺稿	(附梅岡遺稿)	全
第九編	日本春秋	(僧日初著)	全

終